

果実病害に強い早生の生食用パイナップル新品種「ジュリオスター」

【要 約】生食用パイナップル新品種「ジュリオスター」は「N67-10」に「クリームパイナップル」を交雑して育成した早生の大果品種であり、花樟病や黒目病などの果実病害の発生が少なく、高糖低酸で食味が良く、「ボゴール」並の日持ち性がある。

【キーワード】パイナップル、新品種、早生、大果、花樟病、黒目病

【担当機関】沖縄県農業研究センター・名護支所・果樹班

【背景・ねらい】

パイナップル生産は、近年、単価の高い生食用果実の割合が増加しており、「ボゴール」、「ソフトタッチ」などの生食用品種の栽培面積が増加している。これら生食用品種は果実品質が高く食味は良いものの、果実が小さく、黒目病など果実病害が発生しやすい欠点がある。そこで、既存品種に比べ果実病害の発生が少なく、大果で「N67-10」より早生であり、「ボゴール」程度の日持ち性を持つ新品種を育成する。

【成果の内容・特徴】

1. 「ジュリオスター」は、1989年に沖縄県農業試験場名護支場（現：沖縄県農業研究センター名護支所）において、「N67-10」に「クリームパイナップル」を交雑して育成した品種である。2000年より「パイナップル沖縄10号」として系統適応性検定試験に供試し、沖縄本島北部と石垣島で地域適応性を検討した結果、優秀性が認められ2008年にパイナップル生食用品種として品種登録にふさわしいとの結論が得られた。
2. 「ジュリオスター」の自然夏実における収穫時期は7月下旬で、「N67-10」に比べ20日程度早く、早生品種の「ボゴール」と同時期である。えい芽の発生が4.9本と多く、夏植えの種苗確保が容易である（表1）。
3. 果実はたる形で、果皮色は橙色、果肉色は黄白である（図1）。自然夏実における果重は1,174gと「ボゴール」、「ソフトタッチ」より大果で、「N67-10」と同程度であるが、果高が高く、玉張りも良い。果肉の硬さは中程度であるが、果汁が多く、高糖低酸で食味が良い（表2）。また、緑熟果の発生割合が少なく、収穫適期は着色歩合で容易に判断できる。
4. 「ジュリオスター」は「ボゴール」、「ソフトタッチ」に比べ黒目病の発生が少なく、花樟病の発生は認められない（表2）。
5. 室温貯蔵での「ジュリオスター」は「ボゴール」に比べ糖酸比の低下が緩やかで、食味の低下も少ない。冷蔵貯蔵における褐斑症の発生も少ないほうである。果実品質や果重減少率などから日持ち性は「ボゴール」と同程度とみられる（表3）。

【成果の活用面・留意点】

1. パイナップル栽培地域の露地栽培に適する。
2. 吸芽の発生が少ないため、1回収穫の作型が望ましい。
3. 冠えい芽が発生するため、収穫前に除去し、外観を整える必要がある。
4. 夏植えー自然夏実の作型での出蕾率が低いため、大苗を定植して収量を確保する。
5. エテホンによる花芽誘導効果は高く、収穫時期の調整が容易である。

【残された問題点】

生食用パイナップル拠点産地の東村、石垣市などで試作栽培を行うとともに関係機関において種苗増殖を行い普及加速をはかる。

[具体的データ]

表1 自然夏実における「ジュリオスター」の生育特性(沖縄農研名護 2001-2008)

品種名	出蕾率 (%)	平均収穫日	冠芽数 (本)	冠えい芽率 (%)	えい芽数 (本)	吸芽数 (本)
ジュリオスター	27.8	7月24日	1.0	36.4	4.9	0.3
N67-10	76.4	8月17日	1.1	0.4	2.1	0.8
ポゴール	66.4	7月22日	1.0	0	3.4	2.0
ソフトタッチ	48.3	7月18日	1.0	0	4.7	0.7

表2 自然夏実における「ジュリオスター」の果実特性(沖縄農研名護 2001-2008)

品種名	果 実			果 肉			果 汁			果実病害 ²	
	果形	果皮色	果重 (g)	色	肉質	果汁量	Brix (%)	酸度 (%)	糖酸比	黒目病 (%)	花樟病 (%)
ジュリオスター	たる	橙	1174	黄白	中	多	16.0	0.62	26.1	5.3	0
N67-10	円筒	橙黄	1192	黄白	中	多	14.1	0.77	19.0	5.3	8.1
ポゴール	たる-円筒	黄橙	819	淡黄	軟	少	18.4	0.63	30.1	21.0	2.1
ソフトタッチ	たる	橙	755	帯黄白	軟	多	17.2	0.68	25.5	20.3	0.3

²2006-2008年の平均値

表3 貯蔵後における「ジュリオスター」の果実特性(沖縄農研名護 2007-2008)

貯蔵条件 調査項目	室温25°C貯蔵									冷蔵5°C貯蔵								
	糖酸比			果重減少率(%)			褐斑症(%)			糖酸比			果重減少率(%)			褐斑症(%)		
	3日	6日	9日	3日	6日	9日	3日	6日	9日	3日	6日	9日	3日	6日	9日	3日	6日	9日
ジュリオスター	28.2	26.0	26.7	3.1	5.7	8.6	0	0	0	26.6	21.8	21.6	1.4	1.9	3.1	0	0	15.4
ポゴール	27.2	21.5	19.1	4.2	5.6	10.3	0	0	0	28.3	27.5	23.0	1.5	2.0	3.1	0	0	0

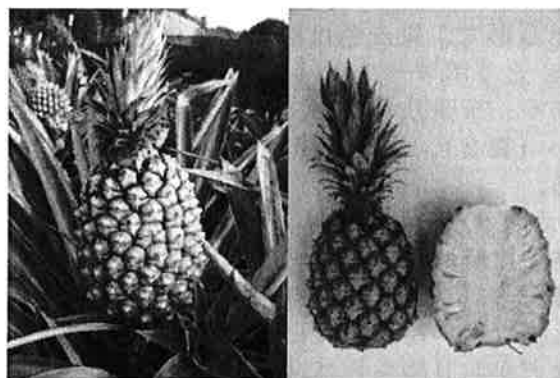


図1. 「ジュリオスター」の結実状況と果実

[研究情報] 研究課題名：生食用パイナップル品種の育成

課題ID：1989農001 実用化研究

予算区分：指定

研究期間：1989～2008年度

研究担当者：正田守幸、竹内誠人、池宮秀和、栗国佳史、與那嶺要、高原利雄、金城鉄男、岩本由美、出花幸之介、新崎正雄、井上裕嗣、比嘉正和、上地邦彦、當間ひろの、大城和久、仲宗根福則、添盛浩、喜納兼二

発表論文等：種苗法に基づく品種登録申請（出願公表 第23549号）

正田守幸ら(2009)生食用パイナップル新品種「ジュリオスター」の特性
園芸学研究 8巻別冊2

生食用パイナップル品種「ゴールドバレル」の高品質収穫時期の検討
及び除冠芽による商品化率向上の検討

[要 約]

生食用パイナップル品種「ゴールドバレル」の高品質果実収穫期は、ハウス栽培において4月中旬収穫～自然夏実収穫（花芽誘導処理は10月上旬以降）であり、また露地栽培においては、6月中旬収穫～自然夏実収穫（花芽誘導処理は11月上旬以降）である。

露地栽培における自然夏実の「ゴールドバレル」は、除冠芽をしても品質に影響はなく、懸念された果芯黒変病の発生もなかったことから、商品化率を高める方法として有効である。

[キーワード] パイナップル、ゴールドバレル、栽培、高品質、除冠芽

[担当機関] 沖縄県農業研究センター名護支所・果樹班

[背景・ねらい]

名護支所で育成し登録された生食用品種「ゴールドバレル」（沖縄8号）は、早生品種で大果という特徴を持ち、食味も良いことから、高品質果実として差別化販売が出来る品種とされている。そこで露地栽培、ハウス栽培において高品質果実として収穫出来る期間を検討した。また、「ゴールドバレル」は、他の品種に比べ多冠芽の発生率が約4割と高いため、外観を損ね商品化率が低下する。そこで商品化率を高めるため、余分な冠芽を切除し1本にした場合、果実形質や品質に影響があるかを検討する。

[成果の内容・特徴]

1. ハウス栽培における「ゴールドバレル」は花芽誘導処理時期を変えることで、12月上旬～6月中旬の間収穫出来る。収穫果の品質としては、12月～4月上旬までは糖酸比が低く、また3月までは低温障害である褐斑症も多く発生する。しかし4月中旬以降は糖酸比も高くなり食味も良くなる（表1）。
2. 露地栽培における「ゴールドバレル」は花芽誘導処理時期を変えることで、12月中旬～9月中旬の間収穫出来る。収穫果の品質としては、12月～6月中旬までは糖酸比が低く、またハウス同様3月までは低温障害である褐斑症も多く発生する。また、6月下旬以降の果実は糖酸比も高くなり食味も良いが、9月以降の秋実になると果芯幅が太く可食部が少なくなり、さらに収穫前の果柄折れが多く、対策が必要である（表2）。
3. 除冠芽を行った果実について、果実特性・品質を調査した結果、除冠芽区は多冠芽区に比べ果実重は増加し、糖度・酸度の差は見られない。また除冠芽区、多冠芽区ともに、果芯黒変病の発生はない（表3）。
4. 除冠芽処理後の果実は、収穫時まで単冠芽を維持した果実が70%以上である（表4）。

[成果の活用面・留意点]

1. 露地の場合と異なり、ハウス栽培では促進夏実でも果実が肥大するため、果柄が折れないように支えを設置する。

[残された問題点]

1. 安定した吸芽の発生や苗の確保が出来ておらず、今後適正苗重や施肥方法等、検討する必要がある。

[具体的データ]

表1. 「ゴールドバレル」のハウス栽培における収穫時期別の果実特性及び品質(05-06年)

処理日	収穫日	果実重 (g)	果芯幅 (cm)	糖度 (%)	酸度 (%)	糖酸比	食味値	褐斑症率 (%)	吸芽本数 (収穫時)
7/22	12/19	1,421	3.7	14.7	1.02	14.9	2.1	40	0.0
8/25	2/14	1,667	4.3	12.4	0.84	15.2	2.1	60	0.0
9/21	4/2	1,779	3.8	16.4	0.89	19.8	3.1	5	0.0
11/7	6/3	2,152	3.2	18.2	0.78	23.7	3.7	0	0.8

※食味点は食不可(0)～食可(3)～おいしい(5)の6段階評価の平均値

表2. 「ゴールドバレル」の露地栽培における収穫時期別の果実特性及び品質(05-08年)

処理日	収穫日	果実重 (g)	果芯幅 (cm)	糖度 (%)	酸度 (%)	糖酸比	食味値	褐斑症率 (%)	果柄折れ (%)	吸芽本数 (収穫時)
7/22	12/19	1,901	4.2	13.3	0.97	14.1	1.8	80	-	0.0
8/25	2/27	1,876	4.5	11.0	0.73	15.1	1.3	100	-	0.0
9/21	5/7	1,602	3.7	15.7	0.96	17.9	2.4	0	-	0.8
10/29	6/12	1,069	2.7	18.9	0.96	20.0	3.2	0	5	1.1
11/8	6/28	749	2.5	19.6	0.77	25.6	3.9	0	0	0.9
11/19	7/5	996	2.6	18.3	0.72	25.8	3.8	0	0	1.0
11/7	7/13	1,247	2.3	18.2	0.62	29.4	4.6	0	0	0.1
4/18	9/3	1,552	4.4	15.1	0.60	27.6	3.6	-	32	-
5/12	9/17	1,404	4.3	15.4	0.60	26.3	2.8	-	46	-

※食味点は食不可(0)～食可(3)～おいしい(5)の6段階評価の平均値

表1. 除冠芽区と多冠芽区(無処理)の果実特性・品質の比較 (07年、08年の平均)

	収穫月日	果重 (g)	酸度 (%)	糖度 (%)	果芯黒変病 (%)	サンプル数
除冠芽区	7月13日	1,845	0.50	16.9	0	25
多冠芽区	7月14日	1,502	0.59	16.6	0	24

表2. 冠芽切除後の収穫時における冠芽数の割合(07年、08年の平均)

冠芽数	1	2	3本以上
割合	72.6%	17.7%	9.7%

※参考 「ゴールドバレル」と「N67-10」の自然夏実における果実特性及び品質

	収穫日	果実重 (g)	果径 (cm)	芯幅 (cm)	糖度 (%)	酸度 (%)	糖酸比	病害 (%)	吸芽本数	冠芽本数
ゴールドバレル	7/25	1,577	12.7	3.5	17.7	0.52	35.9	22.6	0.5	1.4
N67-10	8/22	1,208	11.5	2.1	13.4	0.73	19.2	10.1	1.1	1.0

[研究情報]

研究課題名：パインアップル生食用新品種「沖縄8号」の栽培技術の確立

課題ID：2005農011 実用化研究

予算区分：県単

研究期間：2005年～2008年度

研究担当者：仲宗根福則、竹内誠人、長浜隆市、宜保永堅、平良洋介、仲里孝直

発表論文等：なし

特許取得予定の有無：

トウガンの立体栽培による労働姿勢の改善

[要 約] トウガンの地這い栽培と立体栽培における「交配作業」と「収穫作業」の労働姿勢についてOWAS法を用い比較検討したところ、トウガンの立体栽培は「収穫作業」および「交配作業」において作業姿勢が改善された。

[キーワード] トウガン、栽培管理、立体栽培、地這い栽培、OWAS法、労働比較

[担当機関] 沖縄県農業研究センター宮古島支所 作物園芸班

[背景・ねらい]

地這い栽培（以下 地這い）は管理・収穫作業など腰を屈めた姿勢で行うため、腰にかかる負担が大きく、作業姿勢の改善が求められている。近年、その対策として立体栽培（以下 立体）が行われはじめているが、立体が地這いに比較し作業姿勢の改善がどの程度図られたか明らかではない。そのため、今回は両栽培法に共通する作業である「交配作業」と「収穫作業」の労働姿勢についてOWAS法を用い比較検討する。

[成果の内容・特徴]

立体区は収穫作業において地這い区に比較しすべての作業コードのAC3の値が低く(表1)、さらに交配作業においても雄花探索と雌花探索のAC3の値が低いことから(表2)、収穫作業および交配作業において立体区は地這い区に比較して労働姿勢が改善された栽培法であると評価された(表3)。

[成果の活用面・留意点]

トウガンの立体栽培の基礎資料とする。

[残された問題点]

1. 収穫作業における運搬作業の姿勢の改善
2. その他の作業についての労働姿勢に関する比較

[具体的データ]

表1. 収穫作業についての各時点の姿勢のAC判定と作業コードのクロス表

作業コード	AC判定 ^{a)}				コード別の合計	
	AC1	AC2	AC3	AC4		
地這い区 (慣行法)	探索	0(0.0) ^{b)}	10(37.0)	17(63.0)	0(0.0)	27(100)
	収穫	0(0.0)	7(63.6)	4(36.4)	0(0.0)	11(100)
	運搬	0(0.0)	0(0.0)	9(100)	0(0.0)	9(100)
	合計	0(0.0)	17(36.2)	30(63.8)	0(0.0)	47(100)
立体区	探索	22(62.9)	13(37.1)	0(0.0)	0(0.0)	35(100)
	収穫	5(50.0)	3(30.0)	2(20.0)	0(0.0)	10(100)
	運搬	0(0.0)	0(0.0)	5(100)	0(0.0)	5(100)
	合計	27(54.0)	16(32.0)	7(14.0)	0(0.0)	50(100)

a) AC1:改善は不要である AC2:近いうちに改善すべきである AC3:できるだけ早期に改善すべきである
AC4:ただちに改善すべきである
b) 度数、()内は%。

表2. 交配作業についての各時点の姿勢のAC判定と作業コードのクロス表

作業コード	AC判定 ^{a)}				コード別の合計	
	AC1	AC2	AC3	AC4		
地這い区 (慣行法)	雄花探索	0(0.0) ^{b)}	6(66.7)	3(33.3)	0(0.0)	9(100)
	雌花探索	1(10.0)	7(70.0)	2(20.0)	0(0.0)	10(100)
	交配	0(0.0)	10(100)	0(0.0)	0(0.0)	10(100)
	合計	1(3.4)	23(79.3)	5(17.2)	0(0.0)	29(100)
立体区	雄花探索	7(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	7(100)
	雌花探索	1(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	1(100)
	交配	10(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	10(100)
	合計	18(100)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)	18(100)

a) AC1:改善は不要である AC2:近いうちに改善すべきである AC3:できるだけ早期に改善すべきである
AC4:ただちに改善すべきである
b) 度数、()内は%。

表3. 地這いと立体栽培における労働比較の総合評価

作業内容	作業コード	区名	姿勢負担 [*]	区名
収穫作業	探索	地這い区	>	立体区
	収穫	地這い区	>	立体区
	運搬	地這い区	>	立体区
交配作業	雄花探索	地這い区	>	立体区
	雌花探索	地這い区	>	立体区
	交配	地這い区	=	立体区
総合評価		地這い区	>	立体区

※: AC3とAC4の合計値をもとに評価した

[研究情報]

研究課題名: 立体栽培と地這い栽培の交配作業と収穫作業における労働姿勢の比較

課題ID: 2007農019 研究区分: 実用化研究

予算区分: 県単

研究期間: 平成19年度～平成20年度

研究担当者: 屋良利次、大石 毅、棚原尚哉、宮城聡子、與座一文、伊志嶺弘勝、伊山和彦、新里武彦

発表論文等: 農業研究センター報告に投稿予定。

h19年度の現地調査の結果、5件の農家で立体栽培を実施を確認した。

種なしシークワサー新品種「仲本シードレス」

〔要 約〕シークワサーの新品種「仲本シードレス」は種なしで早生の特徴である。特に、8-9月には料理用、9月以降は加工用として、12月には生食用に適している。

〔キーワード〕シークワサー、種なし、早生、料理用、加工用、生食用

〔担当機関〕農業研究センター名護支所 果樹班

〔背景・ねらい〕

沖縄県の特産果樹であるシークワサーは、優れた芳香と機能性成分を有した香酸カンキツで、料理用(青切り)、加工用及び生食用(完熟)果実として消費されている。しかし、用途によっては種子が多いことや果実が小さいことなどの問題点がある。そこで、1975年頃から1998年まで沖縄県全域で収集した有望と思われる在来カンキツの遺伝資源75系統を調査し、優良系統を選抜する。

〔成果の内容・特徴〕

1. 1960年頃に名護市の仲本氏の園地から「勝山系統」の偶発実生として種なしシークワサーが発見された。1981年2月に農業試験場名護支場(現：農業研究センター名護支所)に仲本氏から穂木を導入した。2006年から品種登録に向けた調査を開始し、2007年に仲本氏から県へ種なしシークワサーの権利を譲渡された。2009年3月に「仲本シードレス」として品種登録された。
2. 「仲本シードレス」の種子数は「大宜味系統」に比べて、極めて少なく、種なしの特徴を持っている。また、果形は扁平果実である(表1)。
3. 樹勢は大宜味系統に比べて弱いが、かいよう病およびそうか病抵抗性は同程度である(表1)。
4. 料理用果実として概ね果実横径30mm以上、果汁量5ml以上、クエン酸6%以上が好ましく、8、9月は料理用果実として適している(図1、2、3、4)。
5. 9月以降は果汁量が増加し、種子もないため加工用として優れている(図2)。
6. 大宜味系統に比べて減酸が早く、12月は1%以下となり、Brixも9%と大宜味系統と同程度であることから、生食用として利用可能である(図3)。

〔成果の活用面・留意点〕

1. 樹勢はやや弱く、樹形をコンパクトに仕立てることが可能なことから、管理作業の軽労化が図られる。
2. ジャーガル、島尻マージ地域で栽培するにはシークワサー台木が好ましい。
3. 苗木は県と実施許諾契約した団体を通して販売する。

〔残された問題点〕

1. 樹勢強化および収量増加対策試験を行う必要がある。
2. 幼木期の着果安定対策試験を行う必要がある。

[具体的データ]

表1 「仲本シードレス」の樹および果実特性(2007年)

系統及び品種	枝梢の太さ (mm)	節間長 (cm)	樹 勢	隔年結果性	抵抗性		果実の形	種子数	果実重 (g)
					かいよう病	そうか病			
仲本シードレス	3.2	0.8	中	高	中	中	扁平	0.3	39.1
大宜味系統	3.8	1.2	強	高	中	中	扁球	13.9	40.5

※農林水産省品種登録・香酸カンキツ類の特性表を基に調査

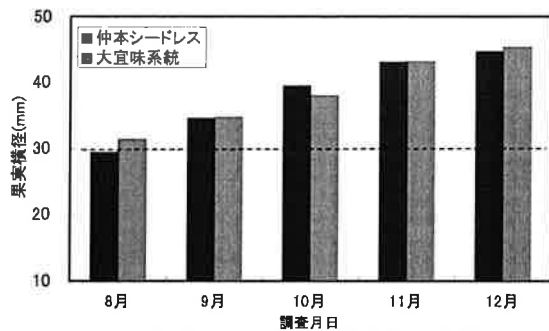


図1 仲本シードレスと大宜味系統の果実横径

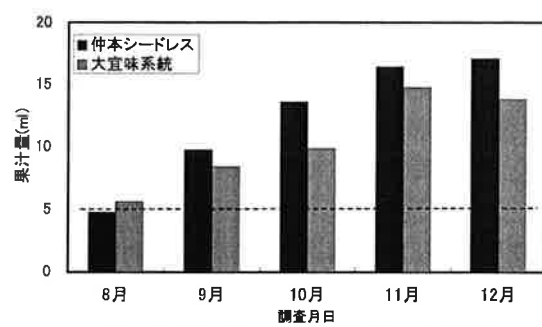


図2 仲本シードレスと大宜味クガニーの果汁量

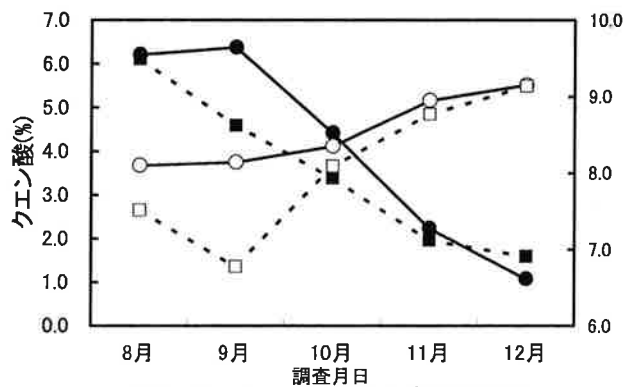


図3 仲本シードレスと大宜味系統のBrixおよびクエン酸の推移

●—● 仲本シードレス・クエン酸 ■—■ 大宜味系統・クエン酸
○—○ 仲本シードレス・Brix □—□ 大宜味系統・Brix

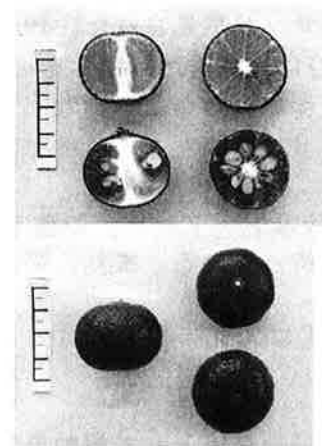


図4 青切り果実の断面と青切り果実外観

断面上：仲本シードレス、
断面下：大宜味系統

[研究情報]

研究課題名：シークワサーの優良系統の果実特性調査

課題ID：2008農015

予算区分：県単

研究期間：2008～2010年度

研究担当者：比嘉 淳、瑞慶山 浩、栗国 佳史

発表論文等：シイクワサーの優良系統の選抜(2000,沖縄農業研究会発表)

特許取得予定の有無：2009年3月6日品種登録(登録番号17737号)

秋小ギクの新品種候補 ‘03-51-22’

[要約]

冬春季の電照抑制栽培に適する ‘03-51-22’ を育成した。花色は赤紫色、小輪多花系で、花のボリュームに優れる。

[キーワード] 秋小ギク、品種育成、電照抑制栽培、着色花蕾数

[担当機関] 農業研究センター・野菜花き班

[背景・ねらい]

沖縄県では冬春季の温暖な気象条件を生かした小ギクの電照抑制栽培が盛んである。現在、主要品種となっている県育成品種 ‘沖の乙女’ は生育や開花揃いが良い反面、花が大きく花数が少ないという欠点を持っている。そこで、小輪多花でボリュームのある秋小ギクを育成する。

[成果の内容・特徴]

1. 秋小ギク ‘03-51-22’ は、2002年度に旧農業試験場園芸支場で ‘沖の乙女’ と ‘02-5’ を交雑した実生集団の中から選抜され、2004年度～2008年度に系統選抜試験及び生産力検定試験、現地適応性試験を実施した結果、総合的に優れていると判断された。
2. 花色は赤紫色、花径は ‘沖の乙女’ より小さい。切り前時着色花蕾数は多く、花のボリュームに優れ、小輪多花系である。到花日数は年末・彼岸両作型とも50日以内で短く、 ‘沖の乙女’ と同等である。伸長性は ‘沖の乙女’ にはやや劣り、 ‘沖の白波’ 並で、また、切り花重はやや軽めである (表1)。
3. 収量は ‘沖の乙女’ より高いがL品率はやや劣る。開花揃いが良く、再電照効果も高い (表2)。
4. 「JAおきなわ実験農場」及び「沖縄県種苗センター」における現地試験でも同様の結果が見られた(表3)。
5. 2008年6月に生産者圃場の現地試験において、疫病による立ち枯れが発生した (データ略)。

[成果の活用面・留意点]

1. 高温多湿時に疫病による立ち枯れ被害が見られ、予防的防除の必要がある。
2. 3月出荷向け品種とする。

[残された問題点]

なし

[具体的データ]

表1 「03-51-22」の到花日数及び切り花特性

作型 (圃場)	品種名	花色	消灯時草丈	切り前	到花 日数	切花長 cm	切花重 g	切り前時 着色蕾数	花首長 cm	花径 cm	茎径 mm	マハ 被害率 %
			cm	月日								
12月 (平張)	沖の白波(標)	白/C	39	12/5	51	105	48	18	5.8	4.1	5.5	10
	沖の乙女(比)	赤紫	33	12/2	48	87	62	16	5.8	4.9	6.9	0
	03-51-22	赤紫	53	11/30	46	101	55	22	5.7	3.8	6.5	0
3月 (露地)	沖の白波(標)	白/C	47	3/8	49	78	53	15	6.3	4.3	6.4	25
	沖の乙女(比)	赤紫	49	3/5	46	88	51	14	6.4	4.9	7	0
	03-51-22	赤紫	59	3/4	44	84	48	17	6	3.4	7.3	0

(耕種概要) 12月開花作型:2006年8月22日定植、定植後4時間暗期中断、8月29日摘心、10月26日消灯
3月開花作型:2006年11月15日定植、定植後4時間暗期中断、11月28日摘心、2007年1月19日消灯(再電照4-12日)
マハ被害率:マハモグリハエ被害本数/調査本数

表2 「03-51-22」の切り花収量及び特性評価(3月開花作型)

品種名	収量 (本/a)	規格別比率				特性評価				
		L %	M %	S %	規格外 %	開花揃い	再電照 効果	水揚げり	花持ち	葉持ち
沖の白波(標)	4,711	55	28	0	17	◎	○	○	○	○
沖の乙女(比)	4,267	65	17	2	17	○	◎	○	○	○
03-51-22	5,111	43	29	9	19	◎	◎	○	○	○

特性評価:◎優れる、○普通、△やや劣る、×劣る

表3 現地試験における「03-51-22」の結果

試験地	作型	消灯時	切り前	到花 日数	切花長 cm	切花重 g	花蕾数	花首長 cm	花径 cm
		草丈 cm	月日						
JAおきなわ 花卉実験農場	12月出荷作型	67	11/29	44	106	42	14	5.1	2.6
種苗センター	1月開花作型	37	2/1	47	90	-	19	-	4.1
JAおきなわ 花卉実験農場	2月開花作型	55	2/20	48	84	40	21	7.0	4.0
種苗センター	4月開花作型	50	4/6	49	90	-	19	-	3.8

(耕種概要) 12月開花作型:2007年8月14日定植、8月24日摘心、10月17日消灯
1月開花作型:2007年10月5日定植、10月22日摘心、12月16日最終消灯(再電照4-12日)
2月開花作型:2007年10月30日定植、11月9日摘心、2008年1月4日消灯
4月開花作型:2007年12月7日定植、12月27日摘心、2008年2月17日最終消灯(再電照4-12日)

[研究情報]

研究課題名:秋小ギクの品種育成

課題ID:1992農001

予算区分:県単

研究期間:1992年度~

研究担当者:宮城悦子、関塚史朗、儀間直哉、照屋寛由、玉木力

発表論文等:なし